

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 益子 直紀  
学位 博士 (保健学)  
学位記番号 新大院博 (保) 第50号  
学位授与の日付 令和5年3月23日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

博士論文名 小児がんサバイバーの心理的合併症に対する支援に向けた基礎的研究  
—PTGを促進する自己開示支援の検討—

論文審査委員 主査 坂井 さゆり  
副査 住吉 智子  
副査 田中 美央

博士論文の要旨

近年、小児がん治癒率向上の一方で、小児がんサバイバー (Childhood cancer survivors; 以下, CCS) の身体的晩期合併症や心理的晩期合併症が問題となっている。このうち、心理的合併症には有効なフォローは示されておらず、治療後長期間を経た CCS には PTSD やうつ・不安、社会的自立の阻害、QOL 低下などの問題が生じている。ストレス研究では、非常に困難な人生の状況と闘った結果経験するポジティブな心理的变化として Posttraumatic growth (以下, PTG) が報告されており、サバイバーの自身で困難を乗り越えていく助けとなると説明されている。CCS の PTG は国内外で報告されているが、PTG を促進するケアは明らかにされていない。PTG 理論を基盤とした先行研究では、自己開示に対する受容的反応が得られると PTG が促進されることが明らかにされ、退役軍人や乳がん患者には PTG を促進するプログラムが開発されている。研究目的は、CCS が周囲の人々に自分の疾患を自己開示できた経験とその心理的影響を明らかにすることにより、PTG を促進する自己開示支援を検討し、CCS の心理的合併症に対する支援に向けた基礎資料を得ることである。

対象は、小児期 (0~15 歳) にがんを発病し、最終治療終了から 5 年以上経過している 20 歳~40 歳までの CCS とした。研究は、定性的で記述的なデザインを使用した。PTG 理論を基盤として、CCS の自己開示を明らかにしていくために、研究参加者の属性として PTG を示すために、補足的に量的な分析を加えた。結果、研究参加者は、20 歳から 39 歳の 13 名で、小児がんと診断された年齢は平均 8.9 歳であり、PTG 平均値は 3.65 で 4 因子の平均値は全て 3.0 (まあまあ経験した) 以上であった。t-検定では、患者会への参加 1 項目だけが PTG の平均値に有意差を示し、患者会に参加したことのある人は、そうでない人に比べて PTG の平均値が高かった。自己開示前の CCS は特別視を強く懸念し、小児がんを秘匿して入院生活や退院後の生活を送っていたが、思春期から青年期になると全員が他者への病気説明や自己開示を経験していた。定性データのからは 3 つの概念「自己開示欲求の高まり」、「自分や他人の人生を豊かにした喜び」、「関係変化への期待感の高まりと失望感」と 8 つのテーマが抽出された。自己開示の心理的影響にはプラスとマイナスの両方があるが、危険を冒してまで自己開示を行うことは、他者との親密

な関係の発展やCCSの社会性を促進していた。自己開示の促進因子は、人間関係の自信につながる友人の承認と勇気づけであり、自己開示のポジティブな成果は、いずれも開示相手の肯定的な受け止めにより生じていた。

一方、ネガティブな成果としては、否定的な自己概念につながるフラストレーションの増大があり、開示相手の非支持的反応を得ることで生じていた。しかし、著しい自尊心の低下を報告した者は無く、開示相手の非支持的反応の原因を自己分析し、小児がん罹患により失ったもの・得たものを再度深く考え、闘病体験の価値や意味を見出す機会としていた。CCSにとって不成功に終わることもある自己開示は、健康な他者との関係性を親密化させるために行う敢えてのチャレンジであり、それ自体が病気の克服体験であると示唆された。同世代とのつながりや親密性を強く求める Adolescent and young adult (以下、AYA) 世代にある CCS に対して、自己開示を支援することは、PTG に肯定的な影響を与えると推測された。開示相手の非支持的反応により、CCS が自己開示のネガティブな成果「失望と慎重さ」を得たとしても、トラウマからの回復に向けた意図的熟考へつながる可能性が示唆された。本研究のサンプルサイズは13名と小さい。小児がんには多様ながん種があることや、AYA 世代にある CCS の多様性を踏まえると、今回の成果を一般化する際は注意を必要とする。また、インタビュー時点で治療を継続している人はいなかったことから、重い晩期合併症を持つ人の自己開示は異なるかもしれない。今後は、PTG を促進する自己開示への挑戦を支えるケアプログラムの開発が課題であり、さらに対象を広げた調査が必要である。

結論として、1) CCS の自己開示の成功に向けて、がん体験者としての自信獲得、友人からの承認、重要他者からの勇気づけを強化することが有効であること、2) 自己開示に向けた支援では、CCS が小児がん体験から学んだことを生かそうとする、また、意味を見出そうとする意図的熟考を支えることが重要であることが示された。

#### 審査結果の要旨

上記論文について、主査1名、副査2名の計3名で審査を行った。

##### 1. 「保健学（看護学）の視点（価値）」についての審査

申請論文は、保健学（看護学）の発展に貢献し得る着眼があり新知見が見出されているか、について審査をおこなった。CCS の長期フォローアップとしての心理的合併症に対する支援の研究は世界的に十分ではない。本研究の知見が今後のケア開発に資する研究として貢献することが期待される。特に、PTG という概念に着目し当事者の「自己開示」の経験を記述する試みは独創的である。AYA 世代の小児がんサバイバーの心理的合併症に関する支援につながる研究であり保健学の発展に寄与する優れた論文であると判断した。

##### 2. 論文構成と内容に関する審査

本論文は、I 序論、II 文献検討、III 研究方法、IV 結果、V 考察、VI 研究の限界と課題、VII 結論、VIII 文献、で構成されており、論文の趣旨を把握するために、各項の内容は十分かつ詳細に記述されていた。論文題目は、論文の趣旨を捉えており、研究目的と背景は明解に記述されていた。方法は定性的・定量的方法を適切に活用し、記述は十分であった。研究計画は倫理審査委員会の承認を受け実施されており、研究参加者への倫理的配慮も十分に行われていた。結果は対象の内面変化を捉える内容で一貫性があり、明解に記述されていた。図、表も適切であり、結果全体は客観的・論理的に記述されていた。考察は、

目的にそった記述になっており、先行研究との比較も十分に行われていた。結論は、目的に対応して適切に導かれており、記述が簡潔であった。研究の限界と今後の課題への言及も十分であった。引用文献は86文献あり、近年の文献も適切に引用されていた。公開審査での発表は参加者に理解しやすい内容で行われ、質疑への応答は的確であった。

以上1、2より、研究課題の妥当性、情報収集能力、研究遂行能力、情報発信能力、倫理的配慮、論文作成能力の観点において審査した結果、本論文は、博士論文に値すると判断し、合格と判定した。